

二学期の始めに

北区の学校教育は、1年間で2つの学期に分ける「二学期制」です。学校においては、一つの学期を長くすることにより、長い期間の中で子どもたち一人一人が補足的な学習や発展的な学習に取り組むことができることや、夏休み期間も学期中ととらえ、個々に応じた自主学習や課題研究を通して自ら学ぶ意欲と態度を育成することを願って、平成18年から導入されました。北区の特徴である「学校ファミリー」における諸行事や地域行事なども考慮し、兄弟姉妹が同じ学期制となることが望ましいことから、幼稚園も小・中学校と同様の学期となっています。幼稚園では、学校のような通知表はありませんが、この節目に、自分自身の成長を実感できるとよいと願っています。

一学期の終業式には、4月から3月までの1年間の長い紙に示し、その半分が終わった今、素敵なもり組とりす組になったことを一緒に振り返りました。「前よりも速く走れるようになった。」「泣いても、自分で涙を止められるようになった。」「嫌いな物も食べた。」など、何気なく過ぎていくような日常生活の一場面を思い返してみると、自分が成長していることを実感する機会になったようでした。

二学期は、りす組はもり組へ、もり組は小学1年生へと次の学年に近付いていく気持ちが、少しずつ心の中に増えていくことを伝えました。「前の自分を超えようとする。」「悲しいことがあっても、乗り越えようとする。」「好まないことや新たなことも、やってみようとする。」というような気持ち（自立心）は、子どもたちの中に芽生えてきています。

しかし、「うまくいかない。」「失敗したらどうしよう。」など、複雑な心の動きが伴うこともあります。初めから諦めてしまったり、今までできたことをやらなくなってしまうこともあるなど、自立心は右肩上がりに育っていくものではなく、行きつ戻りつです。親としては、歯痒く感じることもありますが、子どもが自分の心の中にある様々な感情を受け止めながらゆっくりと育っていくためには、このユラユラしながらの発達過程が、自立心を育むために必要な時間でもあると言えます。「できたかどうか。」ということだけではなく、「やろうとしている。」「思い巡らせている。」など、「大きくなりたい。」という心の動きに寄り添いながら、「今のあなたは、素敵です。」と、ありのままの今を認めていきましょう。二学期も、子どもたちが自分の成長を自覚して、自己肯定感と自信を積み重ねていかれるように、今の子どもの姿からよいところをたくさん見付けて、具体的に伝えていきたいと思えます。

記憶と記録

我が家では、息子たちの幼少期から撮影したビデオテープを、今になってDVDに整理しています。見直してみると、行事では周りの様子、旅先では景色から食事までのかなりの量を撮影していました。そして、子どもと遊んでいるときは、撮影できないからか、子どもたちが映っているのは案外少なかったことが判明しました。当時は、記録に残そうと一生懸命になっていたようですが、こんなにも残さなくてよかったかと苦笑しています。覚えているのは、写真に撮った場面です。アルバムや写真立てに飾って、何度も見返して余韻を楽しんだからかもしれません。

中には、子どもと爆笑している場面がありました。何でこんなに笑ったのか、残念ながら忘れましたが、子育て中の楽しかった日々はよい時代だったと、しみじみと思い出しています。10月は、親子運動会があります。童心に返って子どもたちと楽しみ、記憶に残る日となりますように。